

橋本みゆき著
『在日韓国・朝鮮人の親密圏
配偶者選択のストーリーから読む〈民族〉の現在』
社会評論社, 2010年

1. はじめに

結婚相手をどう選んだか。結婚するまでどうだったか（親は？ 周りは？）。結婚式をどうするのか、何を着るのか？ それは、年頃の友人たちの間で交わされる茶飲み話あるいは酒の席での話であり、「コミュニティ」の人間にとっては、別段目新しいものでもない。「実は結婚することになった」という報告の次には、ストレートな人であれば「相手はナニ人？」と直球の質問が、あるいは「相手はどんな人？」などといった質問が続いたあとで、「…ところで、ナニ人？」と、やっぱり聞かれる。相手が日本人であれば、「親は大丈夫だった？」「向こうの親は？」などという会話が交わされるのが常（というほどでもない？）である。

本書のテーマは、在日韓国・朝鮮人（この呼称は著者に従う）の結婚である。著者は、少なくともどちらか一方が在日韓国・朝鮮人で、生年でいえば1960年から70年代半ば生まれ、世代でいえば3世に該当する13組のカップルを対象に、彼ら・彼女らがどのように配偶者を選択するに至ったのかについてのライフストーリーを分析することで、個人の抱く民族についての認識を浮き彫りにし、「日本におけるエスニック関係の現在」を描くことを目的としている。

在日朝鮮人を対象にした聞き取り調査やライフストーリー分析は多くの蓄積があるものの、配偶者選択の一点に焦点を絞ったものはなく、また、評者もインタビュー対象者と同世代に属していることもあり、もしかして自分がインタビュー対象者だったらどう応えただろう、と思いながら非常

に興味深く読んだ。

章だてに沿って本書の内容を見ていこう。まず序章で研究の問題設定と重要な概念の定義が語られる。本書のキー概念である山括弧でくくった〈民族〉は、「個人が自らの民族属性を根拠に、具体的な行為選択にあたって設定した認識枠組み」（25、以下本書からの引用はページ数のみを示す）と定義される。著者は集団としての民族という見方ではなく、徹底的に個人の認識に立脚しようとする。自らのインタビュー経験から、集団的な民族の枠組みを参照項に解釈することへの疑問が生じたことによって、個人の「〈民族〉なる認識」（13）とそれに基づく行為に着目したという。そして、その行為の表れる場として配偶者選択を取りあげている。配偶者選択は何よりも、個人が行う、その個人にとって人生の重要な選択の一つであり、その意思決定には民族属性（民族集団の一員であることの客観的指標である国籍や文化的素養、祖父母の出身地）が参照されつつ、自分と将来の配偶者および彼・彼女をとりまく第三者との関係を改めて考え直す契機となるからである。

第1章「親密権獲得の語りへのアプローチ」では、エスニック・マイノリティの配偶者選択についての先行研究を振り返りつつ、①民族間結婚の難しさを文化の違いに還元しないこと（44）、②行為者の自律性に着目し、「民族なるものの表象としての結婚現象から、〈民族〉を構築・実践する場としての配偶者選択過程」へと議論を開いていく必要性（45）が確認される。さらに、本書のタイトルにもある「親密圏」の「獲得」についての説明がなされる。「獲得」ということで「パートナーを決定する個人の行為を捉える」（52）こ

とが再度強調されつつ、親密圏については斎藤純一の提示した定義に負って「重要な他者との関係性」(11)、「具体的な他者の生への配慮／関心をメディアとするある程度持続的な関係性」(52)と定義されている。また、とりわけマイノリティにとって親密圏は、自らの存在を肯定的に受け入れてくれる具体的な他者との持続的關係性や相対的安全性が確保されているので、「現れ」(アレントの言葉)が可能となり、それが社会の支配的価値に抵抗する足場になるという。以上の認識から、「民族間結婚の増加は、親密権獲得可能性の拡大した結果なのではないだろうか」という仮説が提示される。

第2章では、1945年以降の在日韓国・朝鮮人の結婚の動向が素描される。90年代以降、韓国・朝鮮籍者同士の婚姻が著しく減少していること、調査対象者の親世代の結婚の時期(70年代前後)とは、結婚の傾向が違っていることなどが指摘される。また、結婚がどのような問題として浮上してきたのか(「結婚問題」)について、一般的には結婚難や日本人パートナーからの結婚差別、本人にとっては親との葛藤、同胞社会にとっては日本人との結婚の増加によるコミュニティの危機として捉えられていたと述べる。

そして第3章では親密権獲得のストーリーを読む際の三つのポイントが提示される。まず当事者が親密権を獲得するために経験したディレンマと、ディレンマの中で民族属性がどのように考慮されているのか、次に「似合い」の論理として、その組み合わせがしっくり来たと感じられたのはどういう理由か、そして結婚式の衣装選択における意図である。これらを軸に語りを分析することで、〈民族〉基準—「その相手との結婚なら自分なりの〈民族〉を生きられると当事者が判断できた閾値」(90)—がどのように構成されていったのかを解き明かそうとする。

以上、関連事象の考察を踏まえて事例分析に入る。まず第4章では在日韓国・朝鮮人同士での結婚(4例)、第5章では日本人と結婚(7例)、第6章では韓国出身者(ニューカマー)との結婚(2例)となっている。計13例のうち、両方もしくは片方が朝鮮総連系組織関係者および民族学校就

学経験者という事例は7例で全体の約半分である。同胞同士の結婚事例(本書の事例では全カップルの双方ともに朝鮮学校での就学経験をもつ)では、結婚の際に民族属性条件が問題とならなかったこと、同時に、日本人を配偶者とすることへの積極的ないし消極的忌避感が見受けられる。日本人との結婚では、本人および相手の親による民族属性条件をもとにした反対があっただけに、本人の〈民族〉認識には親との関係が強く反映されている。韓国生まれ韓国育ちの韓国人との結婚事例では、民族属性条件が満たされているように思われたが、本人と親との民族(朝鮮人の範囲)の捉え方の違いから葛藤が生じている。それぞれ事例において、選択の背景となる生育環境、パートナーとの出会いから結婚(式)に至るまでの紆余曲折が語られており、読んでいてついつい引き込まれてしまう。ところどころで記述される著者自身の気付きの部分も興味深い。ぜひ本書を直接手にとっていただきたい。

これらの事例分析を通して著者は、配偶者選択において民族という要素は希薄化しているのではないと指摘し、当事者の〈民族〉認識の保持ないし実現がいかにサポートされるかという点において、いまなお重要な意味を持っていると結論づける。そのうえで著者は、〈民族〉認識は状況・文脈依存的事実であること、親や祖父母の世代が考える、そして後の世代に理想として提示する“民族”と、配偶者選択をおこなう本人たちの〈民族〉認識とのズレを見出す。こういった主張は、近年の在日朝鮮人のアイデンティティ研究に照らせば、それほど驚くべき内容ではないようにも思われる。しかし、70年代ごろから唱えられ始め、90年代には半ば検証もなしに既定の事実となった「多様化する在日朝鮮人」言説に一石を投じるものとして評価できるのではないだろうか。評者の記憶では、「多様化」言説の具体的事象として国際結婚の増加とその結果による「ダブル」の増加、日本国籍の取得が挙げられ、それは「民族的アイデンティティの崩壊」「在日同胞社会の基盤解体」などの物言いと互換的に使われていた(評者個人的には「多様化」ではなく「日本人化」ないし「同化」と言ってしまった方がすっきりすると考えていた

が)。本書が示す〈民族〉は結局、一定の像を結ばない。一人の人が複数の文脈に置かれたなかでおこなう選択だから、それは当然ではある。しかしこれを丁寧に読み解くことによって、民族なるものが多様に観念されていることを解き明かしている。つまり「多様化」の中身を一全てとは言わないが一言い当てた本書の意義は非常に大きいと思われる。

本書を読んで学ばせてもらったことも多いが、いくつかの疑問も感じた。そのうち2点について述べておきたい。

まず、日本におけるエスニック関係は、きちんと描かれたのか、という疑問が残る。著者自身も「〈民族〉認識の変化や多様性を論じる「エスニック関係の変動」という課題には十分応えられていない」(278)と振り返っているが、著者はこの「応えられていない」という課題に対して、「それ以前の実態との比較」(同)の点で不十分だと言っている。つまり、「変動」が描けていないというのであるが、それでは、比較のうえではない、現時点におけるエスニック関係について、著者はどのような結論を下しているのだろうか。また、そもそも「エスニック関係」という言葉で何を想定しているのだろうか。

既存のエスニック関係に関する理論的研究は、どこかに「対立」を前提とするような境界アプローチを採用し、エスニック集団の形成・維持・拡大・縮小を論じてきた。そこでは、「集団」が前提とされていた。本書は、集団として民族を捉えることを徹底して排し、あくまで個人の視点に立脚する。かといって、社会と個人が切り離されて捉えられているわけではない。また、「社会問題の枠組みで解釈するのは別様の描き方」(16)を著者は志向しており、これに関しては成功していると思う。しかし、「ミクロレベルのエスニシティ研究を展開する」ことと、「日本におけるエスニック関係を明らかにする」ことがどうも架橋できていないように思えるのである。「日本社会を逆照射する」(24)こと、すなわち、照射された対象たる在日韓国・朝鮮人から「逆」に「照射」された日本社会はいったいいかなる像を見せているのか。ミクロレベルのエスニシティ—個人の〈民族〉

認識、または「エスニック現象」と呼ばれるもの—は、社会問題の枠組みを一旦括弧に入れて語ることができるかもしれないが、エスニック関係を「社会問題の枠組み」以外で語ることが可能なのか。言い換えれば、社会問題ではない枠組みでエスニック関係を語ると、どのような関係が語られるのか。評者の想像力の欠如、あるいは単に無知なのかかもしれないが、社会問題以外の枠組みで語られる「エスニック関係」に想像が及ばない。この点は、〈民族〉基準の構築と、〈民族〉認識の構築、〈民族〉の構築の、それぞれの位相の分節化あるいは関係づけの仕方にも関わる問題でもあるだろう。さらには、祖国／在日志向、同化／異化志向といった、長らく支配的だった在日の類型化論に与えるインプリケーションも大きいだろうと思われるだけに、今後の研究の展開が望まれる。

次に、親密圏という問題設定が活かされているのかをめぐって、いくつか引っかかる点があった。評者は親密圏研究のプロパーではないし、本書も親密圏研究の一環として展開されているわけではない。ただ、昨今の研究の動向では、親密圏を今語ることの意義として、異性愛カップルを前提とする近代的な小家族とそれが等値されてきたことを批判的に問い直し、親密圏の新たな可能性(政治性)を探るという方向性がある。本書が対象としているのは配偶者選択であるがゆえに、結婚ないし婚姻関係という枠内に親密圏を差し戻さざるをえず、外在的な視点ではあるが、若干の物足りなさを感じた。以上が第一点目である。

第二点目は、親密圏の「拡大」あるいは親密圏拡大の可能性についてである。評者は最初に読んだ際に、本書を、親密圏そのものの拡大について論じていると感じた。そして素朴に考えて、親密圏は「拡大」するのか、という疑問が湧いた。これに関して著者の考えが表れている箇所は、おそらく、親密圏の「獲得」を述べた部分であろう。著者は「親密圏の獲得」という時の「獲得」という語に関して、これは「行為者を主語とする本書の視点を表す」(52)としつつ、次のように述べる。「親密圏を獲得すると、選んだ相手だけではなく当該他者に付随する諸々の事柄を引き受けることになるという受動的側面が伴う。付随するものと

は、出身家族、民族属性、経済的・社会的状況、生活習慣など、全人格のおよび周辺の事柄にまで及ぶが、同様に相手にも、自らに付随する諸々を引き受けてもらうことになる」(52)。親密圏における受動性・被縛性について述べた箇所であるが、インタビュー分析の文脈でパートナーおよびパートナーの親との関係形成を「親密圏の他者」の増加と解釈している部分と重ね合わせて考えてみると、親密圏そのものが拡大すると言っているように見受けられる。たしかに、「選んだ相手」とは親密な関係になり、親密圏が形成されていくだろうが、「付随するもの」も「親密圏」になるのだろうか。たしかに、単純に考えれば、拡大は拡大である。家族—具体的な他者—がもうひと組増えるのだから。しかし、親密圏ないし親密な関係とは、そのように加算的に拡大されるものなのか？ この時「親密さ」はどのように定義されるのだろうか。随所に顔を出す「承認」との区別が必要であるように思われる。

第三に、親密圏と「拡大」をめぐるいまひとつの引っかけりとして、親密権獲得の可能性の拡大を、どのような政治的可能性として読み込むのか、という問題である。親密圏を獲得する際の可能性が広がったということ、これは、本人が〈民族〉を実現できると考えるパートナーは、もはや親世代で重視されていた民族属性基準にはもつていない、ということを意味する(269)。ありていには、配偶者選択の幅が広がった、ということだ。しかも、日本人をパートナーとするからといって民族なるものを自身から削いでいくのではなく、むしろ他の合理的理由とともに、自分なりの〈民族〉が保持・実現できるからこそその選択であったことを解き明かした点で、日本人との結婚を同化とみなしてきた風潮への具体的かつ強い批判になっている。しかしながら、この事態が持ちうる政治的含意—日本社会への、あるいは日本における「エスニック関係」へのインパクト—については、示唆するに留まっている。加えて、この「拡大」は、少なくともそこでは自分らしく生きていける場の広がりであるのか、そこを土台とし

て別の場所でも自分らしく生きていけるような場の広がりであるのか。事例を読めば、これもまた人それぞれではあることがわかるが、前者の場合であれば、民族の親密圏への囲い込みと解釈できなくもない。社会的な承認とは異なった承認を、社会的な否認に抗いながら与えることができるのが親密圏であるとするれば、それは親密圏を取り巻く社会をどう揺り動かしたのか、揺り動かさうる可能性を秘めているのか。もちろんこんなことは、「こう変わりました」とすぐさま明示的に言えるものではないだろうが、なんらかの形で迫ってほしかった。これに関しては結婚後の生活も視野に入れなければ見えてこないであろうし、ぜひ今後掘り下げていってほしい。

最後に、評者が接した逸話を紹介して終わりたい。何年前か、在日朝鮮人3世である友人が自分の子の名前を付けるのに、漢字に該当する韓国語読みを尋ねてきたことがある。彼女は韓国語を知らない。日本名で生活しており、子の父親は日本人であった。韓国にはほとんど縁のない生活で、思い入れもなさそうである。それでも、生まれた子には何か「民族」なるものを残したかったのだろうか。

民族がいかなるものとして認識されているのか、どのように実践されるのかは、今後、ますます捉え難くなっていくのかもしれない。しかし人生の節目と思われる時点では、やはり姿を見せる。あわいのような、霧のような、掴みどころの無いものである。それは差別経験や民族への「目覚め」の経験といった、これまでの在日朝鮮人の聞き取り調査に見られるような、いわゆる「民族意識」の有無や濃淡、覚醒の物語で語られる民族とは、確実に異なる様相を見せていくだろう。本書はそんなあわいに溶けていきそうな、時に過大に、時に過小に評価され品定めされる民族について、あるいは評者の関心である、明確に「民族」が設定されていそうな場でのミクロな〈民族〉に対して、考えさせられる1冊であった。

(金友子 [きむ うぢゃ] 立命館大学
国際言語文化研究所客員研究員)